
SWEET

紜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SWEET

【Zコード】

Z7433J

【作者名】

紘

【あらすじ】

チョコレートが大好きな幼馴染の遠子とバレンタインコーナーに買い物に来た幼馴染の圭。

天然でふわふわした遠子が嬉しそうにチョコレートを買い物かごに入していくのを眺めながら、圭はある決意をしてチョコレートを購入したが・・・

バレンタイン、二人の幼馴染の恋模様を描いたほのぼのしたお話。

Case Key(1)

甘い、甘い、チョコレート。

口に含むとあひべつとやかへく。

SWEET

「さより、それ全部買ひつまつー。」

買い物かごに入ったチョコレートを見て怪訝な表情と驚きの言葉を向ける。

遠子の買い物かごの中にはピンク、ホワイト、ブルーなど色鮮やかな包装紙に包まれた甘いチョコレートが詰まっている。

学校帰りにバレンタインコーナーに立ち寄った遠子は買い物カゴに
プレーンチョコからトリュフ、生チョコ、フォンダンショコラとさ
まざまな種類のチョコレートを次々と放り込んでいく。

「うふ、全部買つもつ」

「こしても・・・自分用なんでしょう？」

「どれだけかけて食べていくつもり？」

すでに数日といった量ではないそれに視線を向ける。

「ゆづくつーつずつ味わって食べるの・・・春まで」

「4月までこ?」

ううとうとした表情の遠子にたいして自分は至極真面目な表情で、

それは大した長期戦だ。それなりの量が必要だ、なんて考える。

そんな私の様子を察してか、遠子がゆっくつと首を横に振った。

「春つてこつか、3月14日まで

・・・カゴの中と遠子の表情を交互に見る。

付き合つてが長いせいか、なるほど何を考えてこらのかわかつてきた。

「・・・で、そこからホワイトマーのチラリーネを食べすべの
？」

「うそー。」

「まひづ。

とこうか、遠子の頭の中はチラリーネでできることのできないだ
らつか、と心配すら覚える。

そんな自分の心配もよんにカゴの中のチヨ プレートが増えしていく方だ。

カゴの中に入れたチヨ プレートに視線を移す。

お母さんと妹へのプレゼント用のチヨ プレートが2つ。

自分で食べるつもりも、ほかにプレゼントする人もいないのでこの数が正解、だ。

正解、だけれども・・・

(幸せやつじやく プレートを選んでいく遠子を見てくると)

(思わず)

先ほどから手に取るのを悩んでいたチヨ プレート。

(手が伸びそうになる)

甘い、甘い、チョコレート。

「ねえ、圭ちゃん。ビーフしてお菓子は甘いのか知ってる?」

知らない。

砂糖が大量に入っているから、とか。

「チョコレートはね、ふふ・・・優しくなれる魔法が掛かっているから」

「・・・遠子、チョコレートの食べすぎ」

「本当だつて!」

チョコレートは優しいから甘いのー。」

遠子の訴えがあまりに一生懸命で、

(思わず)

「優しくなれる魔法が掛かってるんだ」

(反覆してしまった)

自分を優しい笑顔で見る遠子を見てあながち嘘でもないかもしれない
い。

チョコレートばかりを食べている遠子は確かに優しい。

彼女は優しさの塊だ。

甘い、甘ーい、遠子。

ずっと一緒にいたいと思^い。

(それほどまるで彼女に依存している)

「あれ、おつかやんそれも買^ううの?」

「うそ

お母さんと妹の分と、

クリーム色の包装紙に赤いリボンが巻かれたチョコレートを買^うい物
カゴの中に入れる。

遠子よりも先にお会計を済ませて、

別々に袋に入れもらつたチョコレートを手に、バレンタインバー
ナーの近くにあるベンチに座り込んだ。

バレンタインデーまであと九日。

最後にカゴに入れたチョコレートに苦渋あることになる。

SWEET · Case Kei

Case Touko(1)

包みを広げるたびに、甘い香り。

表情を和らげていく。

Case Touko(1)

ピンク、ホワイト、ブルー。

色とりどりの包装紙に包まれたチョコレートたちを机の上に広げて
しばらくの間眺める。

チョコレートは遠慮ことつていつだつて甘くて優しい存在だけど、
この時期、その定義にもう一つ加わるものがある。

(特別)

あでやかなラッピングは見ているだけで樂しくなる。

バレンタイン用のチョコレートにはそんな魔法が掛かっているのだ。

(甘ちゃんには言わなかつたけれど……)

それからおもむろに遠子がつかんだのはブルーの包装紙に包まれたチョコレート。

表、裏、表、裏と何度もひっくり返して見て、満足気にそれだけを紙袋に戻す。

そしてピンクの包装紙に包まれたチョコレートを丁寧に開封していく。

少しずつはつとこくへ甘い香りに思わず頬が緩むのがわかる。

(遠子の頬はいつでも緩みっぱなしじゃないか)

圭ちゃんの言葉が頭の隅を横ぎるが、仮頂面でチヨコレートを見る
なんて失礼千万だ。

だとしたら私の頬は緩みっぱなしでも別にかまわない。

包みから解放されたプレーンチョコレートを一粒つかみ、そっと口
に運ぶ。

「お~いしい~」

口の中に広がる味は想像していたものよりもずっと優しい味がした。

ほんのりと心が温かくなつたような気がする。

それから個別包装されているチョコレートたちをあらかじめショッピングで購入しておいた箱にばらして詰め込んでいく。

ワンサイズ小さい箱にも同じようにチョコレートたちを詰め込んでいき、一息ついて中から摘んだチョコレートを口の中に放り込んだ。

選んだのはアーモンドチョコレートだったようで、口の中に優しく甘さと、香ばしい香りが広がる。

同じものをもう一つ摘んで再び口の中に放り込んだ。

「チョコレートにアーモンドを入れた人は天才ね。

わざと運命の出会いだったのよ

SWEET(2)

Case Touko

Two Walk in Pairs

ふんわりと薰る、甘い香り。

その香りに安心する。

SWEET (3)

昨日買つたあれだけのチップルートに囲まれると、チップルートの

香りがその身体にまとわりついでいる。

そのことを実践して教えてくれたのは甘い香りを漂わせて隣を幸せそうに歩いている幼馴染だ。

学校に向かってこるはずの遠子のカバンの中には「おやつ」のチョコレートが大量に詰まっていることだろう。想像にたやすい。

「圭ちゃん、圭ちゃん、昨日発見したんだナゾね・・・」

昨日食べたチョコレートの中にお気に入りを見つけたようで、いつも以上に幸せそうな笑顔を浮かべている遠子。

(毎回思つたれど、悩みなんてなれやうだ)

(羨ましい・・・)

彼女の幸せ製造思考を一欠片でも分けてもらえないだらうか、と思つていたら視界の中に小さな箱が飛び込んでくる。

(ん?)

(箱?)

「・・・だから吉ちゃんにおすそわけ」

ああ、なるほど。

はい、と遠手に渡された箱をおとなしく手に取る。

箱は両手にすっぽり収まるサイズのもので、蓋を開けるとやっぱりチョコレートが入っていた。
ところ狭しといったように色々な種類のチョコレートが敷き詰まっている。

「たくさんの出合いが詰まった美味しい箱のおすそわけ」
「出合について……」

「例えばコレ」

箱の中から「ゴールドの髪で梱包されたチョコレートを一粒出して僕の手のひらにおいた。」

遠子の表情は「食べてみて」と如実に語っていた。

正直なところ朝からチョコレートを口にするのは気が進まなかつたが、この幼馴染のがっかりする表情を朝から見るのも御免だつた。

カサリ、と包装紙をはこてチョコレートを口の中に放り込む。

(甘い)

チョコレートなのだから当たり前といえば当たり前の味。

早く呑み込んでしまおうと思い切りチョコレートを噛み碎くと、中からどろつとした液状のものが溢れだしてきました。

「これ……」

「びっくりした?」

(びっくりしたというか、それ以前に)

「……お酒……」

「そうー・ウイスキー・ボンボン。甘さの中にアルコールのシンとした苦み・・・、美味しいであたしょひ?」

例えるならチョコレート界のシンデレラ・・・

「ウイスキーはチョコレートのことが大好きだけビ、素直になれないのよ。でも大好きなの。

一度意地を張つてしまつて、素直になるタイミングを逃しちゃつたのよ

「…………へえ」

頭を抱え込みそうになりながらもなんとか持ちこたえて、遠子の話に相槌を打つ。

近くにいすぎたせいでどうか、遠子のチョコレート談議に汚染されてきてる。

「ほかにもね、初恋の味だつたり、切ない失恋の味だつたり・・・」

なるほど。

（それで沢山の出会いが詰まつた美味しいおすそわけ、か）

遠子が箱に詰めたチョコレートたちの話をつつとつとしながら向かう学校までの道のり。

SWEET (3) Two Walk in Pairs

SWEET (4) An Old Tale

そもそも遠子がチョコレートにだわるようになったのはいつからだったか・・・

遠子のチョコレート談議を聞くよつこなつて随分たつ。

小さいころから遠子にとってチョコレートというお菓子が特別だったわけではなく、確かに中学に上がってすぐの頃にチョコレートが彼女の「特別」に昇格したはずだ。

SWEET (4) An Old Tale

中学に上がり、だんだんクラスに落ち着いたくらいの頃。

いわゆる思春期という期間に突入した僕と遠子は些細ことで喧嘩した。

原因は本当に些細なもので、些細過ぎて……忘れてしまった。

お互いに意地を張り合い、話もしなくなつて、他人行儀にお互いの名前で呼ぶよくなつた。

「佐々木さん」

（「トーハちゃん」と呼ばれていた女の声）

「藤堂君」

（「ケイちゃん」と呼ばれていた男の子）

呼び合つてるのは13年間一緒に過ごしてきた時間を感じさせないくらい、他人だった。

いつも一緒に登校していた道のりも、時間も忘れ始めていた。公園につづくまつてある見覚えのある背中があった。

何をしているのかここからでは分からなかつたが、長い付き合いで身に付いた感覚か、その背中が助けを求めているように見えた。

(なの元)

以前の僕ならためらいなく踏み出せた一歩が、

(拒絶されることに怯えて)

踏み出せない。

話をしていなかつた時間がまるで、深い溝のようになつて、一人の間にあるようだつた。

こんなに遠ざかることが心配なのに・・・・。

「どうしたの？」

「・・・え？」

「具合でも悪い？」と公園の入り口でずっと立っていた僕に話を掛けってきたのは、近くの高校の制服を着たお姉さんだった。

お姉さんは僕の視線の先と僕を交互に見た後、ニマニマと笑って、何かを納得したように「ああ」と声を漏らした。

「ちょっとここで待つてね」

と一言だけ残して、公園の中で今もうずくまつたままの遠子の元に駆け寄つていいく。

そして、遠子に何か話した後、公園の外で無様に立つたままの僕に手を振つた。

振り返つた遠子はとても驚いた顔をしていて、

もちろん僕もすぐ驚いていた。そんな僕たちの反応に気付いて切るのかいないのか、お姉さんは大きな声で僕に声をかける。

「その少年、彼女足をくじいたらしいの。すぐ近くに私の家があるからそこまで運んでくれない？」
「え、でも・・・」

しぶつてみたものの、結局お姉さんの勢いに押されて遠子をお姉さ

んの家まで運ぶことになった。

お姉さんの家はすぐ近くにあった「美味しい」と近所で評判のケーキ屋さんで、中に入るとすこく甘くていい香りが鼻孔をくすぐる。

「救急箱持つてへるから、遼子ちゃんと一緒に奥に上がつて」

有無を言わせない笑顔におとなしく遼子と一緒に奥に上がらせてもうらう。

遼子と僕はお姉さん（真理さん、といつらじい）がいない間、二人ともどちらかがこのもどかしくなる沈黙を破るかとお互いをつかがつていた。

「お待たせ、少しじつとこしてね遼子ちゃん」

と言しながらテキパキと手渡しをしていく。

「あ、そうだ、一人ともせつかくつちに来たんだからいいものあげるわ」

遼子の手当てお終えた真理さんがだから少しの間待つていてね、と

言いながら再び席を外した。

店のほうからは時折接客の声や作業の音がしてきた。それからお菓子の甘い香り。

(・・・・・お腹すいたな)

その誘われるような甘い香りに、成長期真っ盛りの男子中学生の僕のお腹は少しずつ空腹を訴えていた。

べつこう

不意に耳が拾つた音は自分のものではない。

だとすれば同じ部屋にいるのは遠子だ。

そつと視線を向けると、顔を真っ赤にしてうつむいている遠子の姿をとらえた。

聞いたのは僕だけで、今更幼馴染の前でそこまで恥ずかしがる必要ないのに、と思いながらも遠子がきっと嫌がるだろうと思つて聞かなかつたふりをする。

するとそんな空氣を打ち砕くかのよつてタイミングよく真理さんが部屋の扉を開けた。

「おまたせ！」

「おなかすいたでしょ？店の残り物で悪いんだけど3人でおやつにしましょ！」

とこってお盆に載せていたお菓子を配膳していく。

何種類かの焼き菓子が大きな皿に盛りつけられて、それから湯気の立つ甘い香りのする飲み物を「どうぞ」と渡された。

遠子も僕も「ありがとうございます」と言つて渡された飲み物に口をつけた。

「ココアだと思い口に付けたけれど、これはそれよりもコクがあつて、ところどころ甘さを口の中に広げていた。ココアよりも好きかもしれない。」

「美味しいー。」

「うひや、うんとも僕と同じことを思つたらしく、真理さんは『これ何ですか？』『ア？』と尋ねていた。

「これはね、チヨコレートコンク。私のお皿に入りなの」

「チヨコレートコンクにはね、素直になれる魔法が掛かってるか
『う』

おとなになつたら素直になれなくなるの、と続けて口にした真理さんは切なそうな表情を浮かべていた。

（まるで意地の張り合いが見透かされたいたよつて）

（僕も遠子も）

（真理さんの言葉）

ハツとしてお互いの表情を見た。

陽の傾いた帰り道。

足のくじこた遠子を「ちやんとおへつりあがいてね」と真理さんへ元気で刺されおぶつ歩こうと、「せがやん」と遠子に呼ばれた。

「い」みんな

「僕も・・・」めぐ

そうこえは後にも先にも一人でした喧嘩はこれが初めてだった。

「遠子、けんかした時のこと覚えてる?」

「ホットチキンバー、すいじゅん美味しかったね!」

そうだ、真理さんの店におよつて帰ろうよ、といいながら僕の腕を
ぐいぐいと引っ張つっていく遠子に苦笑いを浮かべながら『 prem
ier amour』の道を急いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7433j/>

SWEET

2010年10月28日06時41分発行